2024年11月3日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

大いなる受容―礼拝へ！

［エレミヤ書30章1～3節、17～22節］

主からエレミヤに臨んだ言葉。「イスラエルの神、主はこう言われる。わたしがあなたに語った言葉をひとつ残らず巻物に書き記しなさい。見よ、わたしの民、イスラエルとユダの繁栄を回復する日が来る、と主は言われる。主は言われる。わたしは、彼らを先祖に与えた国土に連れ戻し、これを所有させる。」

さあ、わたしがお前の傷を治し
打ち傷をいやそう、と主は言われる。

人々はお前を、「追い出された者」と呼び
「相手にされないシオン」と言っているが。

主はこう言われる。見よ、わたしはヤコブの天幕の繁栄を回復し
その住む所を憐れむ。都は廃虚の丘の上に建てられ
城郭はあるべき姿に再建される。

そこから感謝の歌と
楽を奏する者の音が聞こえる。わたしが彼らを増やす。数が減ることはない。

わたしが彼らに栄光を与え、侮られることはない。

ヤコブの子らは、昔のようになり
その集いは、わたしの前に固く立てられる。

彼らを苦しめるものにわたしは報いる。

ひとりの指導者が彼らの間から
治める者が彼らの中から出る。わたしが彼を近づけるので
彼はわたしのもとに来る。彼のほか、誰が命をかけて
わたしに近づくであろうか、と主は言われる。

こうして、あなたたちはわたしの民となり
わたしはあなたたちの神となる。

[1] 「回復の預言」の奥にあるもの

　先週は「永眠者記念礼拝」を行いました。その時お話させて頂いたことは、私たちのこの地上の生涯は、お互いにどうしても「一部分」しか分からない、知らないような関係（そこには傷も残っているし、後悔もあります）を持ったり抱えながらお別れをする、ということになってしまうけれども、本当に主が与える終末の時には、私たちが神様にはっきりと知られているように、地上で別れた者たちとも、主にあって新しくされたお互いとして出会うことが許されるでしょうということでした。そこにあるのは、神様・イエス様の、私たち人間に対する全き赦し・大いなる受容だと思うのです。

今日は旧約聖書・エレミヤ書の30章から見て参ります。このエレミヤ書の30章と来週見る31章は、エレミヤ書の中でも「回復の預言」「希望の預言」と呼ばれるとても素晴らしい部分です。

エレミヤ書を読んでいると、とても不思議に思うことがあります。既に最初の1章10節にこう書いてありました。「わたしは、抜き、壊し、滅ぼし、破壊し」、「建て、植える」というのです。イスラエルの民に対する預言です。まことに厳しい裁きの言葉を表現を変えて一気に語り、しかしそのすぐ後で、「建て、植える」と、回復の宣言もされています。「神様、そのようにまた戻されるのでしたら、抜いたり、破壊しなくてもいいではありませんか」と言いたくなります。しかし、ここに神様の痛みや忍耐があるのではないでしょうか？そして、それが分かった時に、人は本当に新しく歩むことが出来るのではないでしょうか。

[2] 傷の癒し、「礼拝」の回復

 30章で、エレミヤは、バビロンに捕え移されたイスラエルの人々に向かい、こう神様の言葉を告げます。「見よ、わたしの民、イスラエルとユダの繁栄を回復する日が来る、と主は言われる。主は言われる。わたしは、彼らを先祖に与えた国土に連れ戻し、これを所有させる。」正に明るい未来を示す「回復の預言」です。しかし、それは当たり前のことではないのです。人間は「喉元過ぎれば熱さを忘れる」という諺（ことわざ）がありますが、‟結果オーライ”の部分だけしか見ていないと、同じ過ちを繰り返してしまいますよね。私など本当にそういう所があるなぁと思います。「バビロン捕囚」というのは、そもそもどういう出来事でしょうか？それは、神様が愛して契約を結んだ民が、その神様に背を向け、無視したが故の、神様による「懲らしめ」「裁き」の出来事なのです。30章11節にはこういう言葉もあります。「わたしはお前を正しく懲らしめる。罰せずにおくことは決してない」。厳しい言葉です。容赦ありません。しかし、「神様、それはやりすぎでしょう」とは人間は言えないのです。そういう立場ではないですね。ですから15節でもこのように神様は厳しく語ります。「なぜ傷口を見て叫ぶのか。お前の痛みはいやされない。お前の悪が甚だしく　罪がおびただしいので　わたしがお前にこうしたのだ」。

　その同じ神様がおっしゃるのです。どうしてか、そのあなたがたに回復をもたらす、と告げるのです。17節。「さあ、わたしがお前の傷を治し　打ち傷をいやそう、と主は言われる。人々はお前を、「追い出された者」 と呼び 「相手にされないシオン」と言っているが」。 この「傷」とは、自分の罪ゆえの傷です。自分自身に責任があると言えます。しかし、その傷を癒されるのも主だと言うのですね。傷を放っておかれません。神様は、癒し主でもあるのです。この後に続く言葉はとても具体的で、明るい未来が目に浮かんできます。18節以下。「主はこう言われる。見よ、わたしはヤコブの天幕の繁栄を回復し　その住む所を憐れむ。都は廃虚の丘の上に建てられ　城郭はあるべき姿に再建される。そこから感謝の歌と楽を奏する者の音が聞こえる。わたしが彼らを増やす。数が減ることはない。

わたしが彼らに栄光を与え、侮られることはない。ヤコブの子らは、昔のようになり
その集いは、わたしの前に固く立てられる」。

　 廃墟となった都に再び楽の音が感謝の歌と共に響くのだと言います。そしてその集いは主の前に固く立てられるという祝福が語られています。これは神殿における「礼拝」の回復のことに他ならないのではないでしょうか。そのことは24節の言葉にもつながっていると思います。「こうして、あなたたちはわたしの民となり　わたしはあなたたちの神となる」。この言葉は先ほど交読文で読んだ詩編100編の言葉とも通じるものです。「知れ、主こそ神であると。主は私たちを造られた。私たちは主のもの。その民、主に養われる羊の群れ」。

[3] サマリアの女性と私たち―主によって礼拝へと招かれている

 このような「回復」、滅んでもおかしくない罪深い民が、主の前に立ち、心から礼拝を捧げる民へと回復をする、そこには何があるのでしょうか？それを語っているのが21節です。「ひとりの指導者が彼らの間から　治める者が彼らの中から出る。わたしが彼を近づけるので 彼はわたしのもとに来る。彼のほか、誰が命をかけてわたしに近づくであろうか、と主は言われる」。

 これは誰のことを語っているのでしょうか？当時の近い未来で言うなら、ダビデ王家の総督ゼルバベルであるとか、彼を助けた大祭司ヨシュアであるだろうという解釈もありますが、さらに、約600年後のイエス・キリストの到来のことを預言していると捉えることが出来ます。特に主の言葉 「わたしが彼を近づけるので 彼はわたしのもとに来る。彼のほか、誰が命をかけてわたしに近づくであろうか」というのは、イエス様のお姿を彷彿とさせます。

この「ひとりの指導者（＝力ある方）」が来て下さったことによって、私たちは滅びに至る道ではなく、主のものとされて、礼拝を捧げる者へと招かれるようになったのです！―「こうして、あなたたちはわたしの民となり　わたしはあなたたちの神となる」とある通りです。

　私はここを読んでいて、礼拝することを失っていた一人の女性が、イエス様によって礼拝へと招かれている聖書の物語を思い出しました。そうです。あのヨハネによる福音書4章に記されているサマリアの女性です。皆さんよくご存じの物語です。あの真っ昼間に人目を避けてやむなくスカルの井戸べに水を汲みに来た女性に、イエス様が目を留め、イエス様の方から声をかけられたのです。彼女は驚きました。何故かといえば、当時のサマリア人は、ユダヤ人から罪人として排斥されていたからです。これは明らかな差別ですがそれがまかり通っていました。また彼女自身の人生も満たされない思いを常に引きずるような思いを抱えていたのだと思います。何度も男の人に優しく声をかけられては捨てられるという経験をしていたのだと思います。イエス様はこの女性の人生の悲しみを深く察知して「わたしに水を飲ませてください」とお願いしました。それが、彼女の心の井戸の蓋を開けることになりました。そこから彼女は、私たちの先祖はゲルジム山で礼拝をしていましたが、あなたがたはエルサレムで礼拝をしていると言っていますねという話になった。このような言葉が出て来るということは、彼女は今は礼拝していないのです。彼女は、自分は神様に見捨てられているのだという思いが強くあったのではないでしょうか。しかし、この女性に言われたイエス様の言葉は凄いです。「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがこの山でもエルサレムでもない所で父を礼拝することが来る。…今がその時である」と。女性は驚きながら言いました。「わたしはキリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方は私たちに一切のことを知らせて下さるでしょう」。それに対してイエス様は言いました。「それはあなたと話しているわたしだ」。

この時から、彼女は変えられました。聖霊の力でしょう。町へ行って主を伝え、主を讃える者になったのです。私たちも、同じではないでしょうか。主が、私たちのため、命がけで神様に聴き、私たちに近づいてきて下さったのです。そして十字架にまでついて下さいました。何故ですか？私たちが主を礼拝して生きる者となるためです。礼拝の度ごとに、私たちはこのお方の愛の大きさの中に方向転換して立ち帰って行くのですね。―「わたしは、抜き、壊し、滅ぼし、破壊し」、そして、「建て、植える」とエレミヤは語りました。今、私たちは、主の愛の中に植えられ、建てられているのです。お祈り致します。

主よ、この日の礼拝を感謝します。自分だけを見つめていたら、そこに希望はありません。しかし、あなたは私たちを呼び、招いていて下さいます。その声を常に新しく聴く砕けた心を与えて下さい。この後行われる主の晩餐式も、あなたの招きそのものです。そこに示されている、私たちに対する大きな赦しと、また新しく歩みだして行くことが出来る力とをお与え下さい。今日おいでになれなかった方の上にもあなたの導きと恵みが豊かにありますように。主イエス・キリストのお名前によって祈ります。アーメン。